

卒業していく君たちへ

卒業おめでとう。わずか1年間のつきあいでしたが、皆さんは私が校長として三度目に送り出す卒業生です。今日は5つの言葉をプレゼントしたいと思います。

春風や とうし 闘志いだきて 丘に立つ たかはまきよし (高浜虚子)

これからの皆さんの人生は、自分にとって都合のよいことばかり起きるわけではありません。むしろ、皆さん一人一人にとって大変つらい場面と出会うこともあると思います。その時、ほんの少しのユーモアをもち、自分のまわりを見渡すことができるかどうか、それが人生の別れ目となります。どうかその時、逆風に負けないでくださいね。

この俳句は、いろいろな経験をした虚子が、いよいよ自分の人生のすべてを俳句にかけようと決意した句です。どのようなことも、前向きに考えていこうとする思いが前面に出ているようで、私の大好きな俳句です。

新たにチャレンジする時、勝負をかける時、どうか思い出してほしい句です。

人生の実力とは、どのような状況となっても、その状況を幸せと思える力

人の一生にも「耐える時期」と「飛躍する時期」とがあります。何事もうまくいかないとき、どうか地中深く根を張って、花を咲かせ、実をつける時期を待つほしいと思います。

私は徳川家康を尊敬しています。それは右の絵を見てから、尊敬するようになりました。この絵は徳川家康が三方ヶ原の戦いで武田信玄にやぶれた時、この悔しさを忘れないために描かせた絵と言われています。いくさに負けた悔しさ、これからどうしていけばよいかといった不安が、この絵から感じ取れます。その気持ちを忘れないために絵をえがかせたというのは、家康のすごさだと思います。さすが「人の一生は重き荷を背負いて遠き道を行くがごとし」と言いきった家康です。



人生の実力は、事を成し遂げる勢いでも、成し遂げた結果でもありません。人生の3つの坂で、「上り坂」「下り坂」「まさか(真坂)」の場面で、たとえどのような状況となっても、その状況を幸せと思うことができるかどうかだと思います。人生の実力、それは今、目の前の状況を受け止め、自分が持っている力を発揮できるかどうかにかかっています。

努力は、運を支配する

自分が努力した結果がすぐに出るのなら、大多数の人は喜んで努力すると思います。ところが、これが思うようにはなりません。「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古

を練とす」この言葉は^{けんごうみやもとむさし}剣豪宮本武蔵が『^{ごりんのしよ}五輪書』で鍛錬について説明した言葉です。一人前になるためには、結局稽古しかない。とにかく稽古と向き合うことだということです。どうか皆さん、繰り返すこと、稽古することから逃げないでまっすぐな心で取り組んでほしいと思います。

努力した結果はすぐには出ませんが、必ず、しかも確実に「運」は努力することによってひらかれていきます。「運」を自分のものとするために、「稽古」に耐え、前向きにことに対処してほしいと思います。「努力は運を支配する」この言葉を信じて、努力してください。

花神になりたい

私は司馬遼太郎の小説や随筆が大好きです。もともと歴史が好きというよりも司馬遼太郎の作品が好きで、歴史が好きになっていったと言った方が正直なところでは。その中でも日本の軍隊を創り上げた大村益次郎を扱った『花神』が大好きです。大村益次郎は幕末にこつぜんとあらわれ、幕府と対決する西洋式の軍隊をつくり、江戸総攻撃をはじめ函館戦争まで、幕府を直接滅ぼした軍隊の指揮官でした。さらに明治維新以降は、徴兵令と日本の陸軍をつくりあげました。彼は日本軍隊の花神となり、現在九段の靖国神社には彼の銅像が立っています。

『花神』とは「花咲じじい」のことです。桜を咲かすために灰を播いた人。歴史上の人物の役割として、花の種を播く人（つくりはじめる人）、花を育てる人（つくり続ける人）、花の実をとる人（完成する人）がいるみたいです。私たち教師の仕事は「花の種を播く人」です。子どもたちが、様々なことに興味関心をもつことができるかどうか。子どもたちのやる気に火をつけることができるかどうか。それが私たちの仕事なのです。人の一生にもこの3つの時期が交互にやってきます。

日本の歴史の中で、歴史の歯車を回転させ、多くの弟子の能力を引き出し、やる気に火をつけた教育者は吉田松蔭です。松蔭がいなければ、幕末は全く違った形となり、展開は大きく異なっていたと思います。教育者としては、吉田松蔭こそ歴史上No.1の人物です。彼のほとぼしる情熱に感化され、生き方に憧れ、多くの弟子たちは「憧れを求める」生き方をしていたのです。現代、彼のようなすごい教育者が数少なくなってしまう、「憧れを求める」生き方をしている青少年が少なくなってきたのです。きっとこのままでは、やる気をもった前向きな日本人が少なくなるのではないのでしょうか。

私は『津島の達人 ジュニア検定・選手権』『あま市ものしりジュニア検定・選手権』と深くかかわっています。ふるさとの歴史を知ることによってふるさとを愛する子どもをつくりたい。いずれ津島の課題を解決してくれる子どもを育てたい。この「津島の達人」は考えてみれば市をあげての壮大な実験の場になっています。私にとっては歴史の大好きな子どもを育てる「種を播く場」となっています。

花神になりたい。どうか皆さん、これから生きていく中で、今の時期が「花の種を播く時期」か「花を育て続ける時期」か「花の実をとる時期」かを考え、判断し、役割を理解した上で、自分の役回りを演じてほしいと思います。人に大きな影響を与える現代の花神が数多く現れてくれることを切に望んでいます。

校長先生が見つけた石垣の字

校長先生自身の話をします。

校長先生は3年間教師をやめて、遺跡の発掘調査をしていました。その時のことです。清須城の本丸付近で石垣を見付けました。泥だらけになりながら、夜遅くまで石垣の調査をしました。そして石垣の石を一つ一つ取り上げて、シートの上にのせました。



季節外れの大雨が1月に降りました。石垣をおおっていたシートが飛ばされました。あわてて石垣の置いてある所に駆けつけると、雨が石の土を洗い流してくれました。字が浮かび上がってきたのです。『雑賀（雑賀）』という字を発見した瞬間でした。科学の大発見とは、このような感動的な場面を言うのかもしれませんが。興奮して口の中が渴いたことだけ覚えています。次の日より、全国から見学者が来ることとなりました。この発見で、校長先生は時の人となり、新聞の取材を受け、テレビに出演しました。テレビ愛知が『解明される清須城』というニュース番組を制作してくれました。1年以上かけて全国の城の調査をし、やがてこの「石垣の字」について論文をまとめることとなりました。

30近くの文字を見付けましたが、これらの字は紛れもなく織田信長・信雄の時代に書かれたものでした。全国的にも珍しい、多分安土城で見つかり無くなってしまった「石垣の字」以来、全国で2例目の戦国時代の「石垣の字」を見つけたのです。

校長先生はこの発見を境に、歴史に夢中となり、4冊の歴史の本を出版しました。今は1年に5～6回歴史の講演会を続けています。人生の中で大きな課題と直面した時、誠実に、全力を出しきって対応することができるかどうかで、その後の自分の運命を切り拓いていくことができると思うようになりました。

夢が止まらない人生を 『奇跡の夢ノート』

石黒由美子さんという人のお話をします。この方です。彼女は北京オリンピックのシンクロナイズドスイミングの日本団体チームの選手としてオリンピックに出場しました。

しかし、彼女の人生は水泳の選手として恵まれた人生ではありませんでした。彼女は小学校二年生の時、交通事故にあいました。生きていたことが不思議なほどの大事故、大怪我でした。そのため顔面を五百六十針、口の中を二百四十針も縫うことになりました。思うように体も顔も動かない。そんな時に見たオリンピックのテレビ。それがシンクロナイズドスイミングでした。「このスポーツを私もやりたい」彼女は決心します。そして自分が夢見たことをノートに書くようになりました。「算数の宿題を忘れない」「水泳で50メートルを38秒で泳ぐ」などから「お友達のAちゃんの良いところ見つける」など一杯夢や目標を書きました。いつしかそのノートを「夢ノート」と呼ぶようになりました。彼女は夢や目標ができるそれをノートに書き、できるようになると「ありがとうございました」と赤ペンで消していったそうです。夢や目標を文字や言葉で明らかにすることで彼女は一つ一つ夢を実現したそうです。

そして「シンクロでオリンピックに出たい」という目標まで彼女は達成したのです。現在、彼女は大学院で「中学生のいじめ問題」の研究をしています。私はこのいじめ問題のアンケートに協力して、彼女と知り合うことができました。三月十日、彼女から電話を頂きました。今日の卒業式に「奇跡の夢ノートの話をしたい」と言ったら恥ずかしそうにで

も喜んで賛成してくれました。

「南小の六年生の皆さん、夢を言葉にしてください。そして夢に向かってがむしゃらに突き進んで下さい。どうか皆さんの夢ノートが皆さんの言葉で一杯となり、「ありがとうございました」と赤ペンで消す姿を心から楽しみにしています。ご卒業おめでとう。近いうちに私も津島南小を訪ね、学校行事に参加したいと思います」という言葉を頂きました。

皆さん、夢を大切に。そして夢を言葉に置き換えて。どうか言葉に魂を吹き込んで下さいね。

翔び立て南っ子
会うは別れの始まり
人は別れがあるから
新たな出逢いを大切にしたい
よき出逢いを
よき夢を
夢が止まらない人生を

